

9月16日 9:30 山口県防府市野島調査開始
西山森作氏(野島347番地)

♪ちよいと言うてみましょ 音頭出したが やしごよ たのま
天はひろいのに すばるぼしゃ ごじょごじょ
海はひろい…間違えましたごめんなさい…海はふかいのにエビのこしゃまがる

ってその繰り替えしです。それから、あの、そのまから言葉がすんだら本題にはいるんですね。
あの、たとえば「すずきもんど」とか忠臣蔵とか、忠臣蔵の文句をちょっとやってみましょうか?
(北尾:記録の準備ができなかったのもう一度初めから「天のひろいの」を…)

あの、言葉のなかの「口説き」の中にベテランになると「字余り音頭」という七つ、字がカタカナ…
ひらがなで七つの文句に決まっているんですが…ベテランになると、あの、『字余り音頭』というものを
やる連中もいたらしいです。わたしもそのものまねをさしてもらっているんですがね、それをちょっと
やってみましょうかね、忠臣蔵を。

♪あー音頭をちよいと言うてみましょ 音頭出したが やしごよたのま
受けし恵みは山より高く 鳥の毛よりも我が身は軽し
雪もうらみもつもりしやうち 主のかたきをうちかえしたる
いまに 忠義の名もたかなわの 昔をかたらんいざききたまえ

…こういうのがずっと続くわけですね 討ち入り 浅野内匠頭の切腹から討ち入りまで

(北尾「天が狭いかよ…の最初の部分をもういっぺん、すばるが出てくる、星が出てるのを…」)

それに関する本を2冊ほど、あたしまかりなりにも作っまして
(2冊本を持ってこられる)この本の中に忠臣蔵とかあるんですね。

(北尾:まから言葉のすばるは…)

この中(本)にはないですね、枕詞というのが、だいたいわたしはやったことはないのですが
糸巻きがやぶれたらこの「やまかけ」が…うちのほうではあの、つるぎをかけるのを「やまかけ」と
いうんですがね、このしかけのことを「やま」という。で、これを(「やま」に糸をまきながら)ま、
こうするのをやまかけとって。で、したがって糸巻きがこういうふうなのが二重になってから、かせ
をかけてからどんどんとくようになってから(北尾:ああ、かせをかけてから)
そして、餅をつく杵がこの、うしろと前につづいて、4つになってよところつくところあってから
こう…月のうさぎが、それがやぶれたら、糸巻きがやぶれたらやまかけがふたつ、きねが、杵が折れた
らくりわり…うちのほうで畑の「くれ」をわるのを「くれわり」とうちの???でくれといわずに
くりとってくりわりというように発言…発音していたんですが、そういうふうな枕詞も昔はやって

いたということを島の古老から聞いたことがあるんですがね。

(北尾：最初、録るのが上手くいかなかったので天が…海が深いか

海は深いのにエビののこしはまがる。

(北尾：その最初の部分をもういっぺん、そこだけ

天は広いのに…うちのほうの発音のしかたで天はひろいのにすまるぼしは、というところは

「ぼしや」という風に発音しますが…(北尾：そういうふうには島の発音でお願いします)

あらかじめ、あなたがたにご承知おきしていただいたうえで聞いていただいて・・・

(北尾：昔からで)

そういう風にやらないと、口説きの雰囲気は本来の雰囲気が
もう一回

♪あ—————、音頭、ちょいと言うてみましょ 音頭だしたがなんどいうたものか
天はひろいのに すばるぼしやごじょごじょ 海はふかいのにエビのこしやまがる
これは音頭のまくらのことば されば これから 文句にかかる
うけし恵みは山よりたかく 鳥の毛よりも我が身はかるし 雪もうらみも積もりしやうち
主の敵をうちかえしたる 今に 忠義の名もたかなわの むかしょかたらん いざききたまえ

これから私流の字余り音頭がはいります。

♪ころはげんろくじゅうよとせのはるに…という風にわたしはやってるのですが、この本には
十四のやよいというふうになっております

(北尾：うたうとき、うたうひとによって違うのが甚句ですよ)

そういう風にこの、踊り手の手と足にあえば、少々字が余ってもけっこう踊りはやぶれませんので
文句通りに口説いても早すぎたり遅すぎたりすると、太鼓と踊りにあいにくくなりますので

(北尾：で、この前…7年前に来た時に森作さんはおられなかったのですがでも 天のひろいのに
という歌が自由にかえられていて「家は広いのにとつとつかはごじょごじょ」と)

(笑) 海はふかいのにエビのこしは曲がる、と

(北尾：それは、自由に「家は広いのにとつとつかはごじょごじょ」と言う人もいます?)

今にはあまりいないですね。わたしもあまりやったことはないです。

そういう文句もわたしの若い頃に島の古老が口説くのを聞いたことはある。

(北尾：「家は広いのに」?)

いや、海はふかいのにえびのこしはまがる

(北尾：「家はひろいのにとっととかっかはごじょごじょ」はきいたことはない?)

そうですか…わたしもはそういうふうに「天はひろいのにすばるぼしゃごじょごじょ」

(北尾：けっこう、あの、自由にですねそのひとの謡うときによって自由にかわるってというのが?)

そうですそうです…節も、わたしの節よりほかの方が口説く節も結構ちがうのがあります
基本はああいう風になっておりますけれども口説く御方によってずいぶんいろいろ節は変わる
そして、大声で…今は拡声器…マイクがありますけれどもマイクの無い頃には地声でやっておりますので声が続かぬということになったら「疲れ音頭」という、そういう音頭の取り方もあるんですね
疲れ音頭になったらわりと(やりやすい)と。今でもわたしはマイクをやっても、たとえば
すずきもんどやなんかはずっとストーリーをこう初めからしまいまで口説くと15分くらいかかる。
15分もこう…口説きづめで口説くとマイクでも音声が続かなくなるので、疲れ音頭に変えて、
疲れ音頭というのを2・3回やると口説きながらも休むことができ、当たり前前の節に戻れる。

(北尾：歌う以外にも星の事をすまる以外お年寄りも言ってた?)

耳が遠いので…

(北尾：森作さんは昭和のはじめの生まれですね?)

(昭和)7年です。

(北尾：この島で生まれて…明治生まれのひともしばしばいましたよね、明治生まれの人からいろいろ
とこう…星の事ですまる以外に島の言葉で言っていましたか?)

(島)ことばというよりも北極星のことをネノホシと。かわらないからネノホシという。
あれを中心に地球はまわるので あれは朝から晩まで…日が暮れてから夜が明けるまで変わらない
だからネノホシ…根本の星(根の星)。木の根の根です。あれを根本に地球はまわるんだと。
学はないなりに昔の島の漁師はこころえていた

(北尾：全然動かない?一寸も?)

日が暮れて夜が明けるまで動かない。たとえば姫島のほうに昔はうちのほうで「しらさ」といって
エビの、これくらいの、アカエビよりはるかに値段の…相場のいいのが冬になってから寒が強くと
つまり海水温が異様にさがるとシラサエビというのがさがってきてひめしまの方まで漁に出かけていた
んです電気着火の小さい船で。数m…5.6mくらいの小さい船でここまで。

(北尾：大分の姫島まで?)

そうです。南になるので、姫島からうちの島に帰るにはネノホシに北極星に向けて帰ったら
いいからというんで。

(北尾：ホロウをして?)

電気着火で…灯油をたく。ガソリンで始動してから。

(北尾：ネノホシに向かってはしると戻ってこれる?)

漁場に行くときには明るいうちに…午後3時頃に姫島へむかって。

明るいうちは姫島がみえますので。星もなにもたよりにしなくていい。そのかわり、夜明けに午後（午前の間違い？）3時から4時ころになって（網を）あげて帰るときには羅針機もコンパスもなにもないから、ネノホシに向かって（帰る）。

そういう風なやりかたで。北極星に向けて帰ればだいたいこの島にたどり着く

（北尾：ネノホシをみつけた偉い人の話はきいたことはない？ネノホシを見つけた船乗りのことは？）

聞いたことはない。北極星を見つけるには…なにが…あの、北斗七星。あれを伸ばすと北極星に…北斗七星、なんて言ったかなあ

（北尾：ネノホシはおじいさんから？）

島の古老…わたしのうちのすぐ前に物知りのじいちゃんが…明治元年うまれくらい

わたしの父は明治25年うまれで。わたしはうらなりのほうで（笑）昭和7年生まれで

この頃有名なオリオン星座をうちのほうでは「かせぼし」という

（北尾：オリオン座をかせぼし…（漁具をさして）この「かせ」？）

かせ、かせ。

（北尾：これ「かせ」ですよ。巻く「かせ」？）

うちでは「やまかけ」というんです。かけるから。

かせぼしという。どういう字をあてるかまではわからない。

（北尾：糸をこう…撒くのをかせかせ いますよね、ここらではかせは（今も）つかう？）

今はつかわない 今は1本釣りの本職もあまりいない、一艘か二艘くらい、本職といっても周年この時期次期の魚を釣って仕事にするのはいない

（北尾：カセボシは3つの星？3つ並んでいる？）

そうそう、あれをカセ…水のはいるところがおおきくて柄が短いようにぐぐっとなっているところがあるんですね。オリオン星座、あなたがたよくご存知でしょ。あれをうちのほうではカセボシって。

ああいうふうなものも季節で昇る時刻や沈む時刻が違うのでいろいろ文句の中にあるのを

わたしもこどもごころに…たとえばお盆に「すまるまんぞく はやよはななつ」

（北尾：すまるまんぞく？）

すまる…すばるぼし、すばるがまてん（真天=天頂？）にきたら、もう夜は七つ、午前4時？

夏のことなら明らみが

（北尾：今ころですか？すばるまんぞくは）

いや、今頃はもう秋なので。7月頃ですね。6月から7月頃に夏の間で夜が短いのであれがあがったらもう真天にきたら夜が明ける。

（北尾：すばるまんぞくはやよはななつ、の歌もあった？）

それも文句の中にあった。盆歌の中に

（北尾：どんな歌？）

なんという題かはわたしはきいたことはないが、文句を踊り場で聞いて耳に残っておる。

わたしが知っている文句の題はこれ（本）に載せてあるものくらい。

（本をめくりながら）おととい心中…京で一番大阪で二番、江戸で三番名高いおきよ…ああいう文句の内容…あれやなんかはこういう風な原本が入手できないのでこれに載せてない。島の古老がひらがなとカタカナ混じりで書いたのをわたしが借りて本にした。これは忠臣蔵の内容。

（北尾：すばるまんぞくはやよはななつ…うたうことは森作さんはなかった。）

ないです。きいたことはあってもそれはない。

（北尾：「すばるまんぞく」のまんぞくはどう書く？）

満月の「満」に足りる…満足。真天。南中したという意味でしょうね。真天に星がある。星が動きやしないけど、地球が動いてるけど。

（北尾：人によって歌うことがちがう？）

そうですね。なにかほかのことであなたがた、こういうことを聞いてみたいということがあったらいろいろ…わたしが聞いたことがあればあなたがたにお伝えしたい。

（北尾：すまるというのは、あの、魚をとるときの道具でものをひっかける「すまる」ですか？）
そうですそうです。

（北尾：あれとは関係ない？）

あれも…あるんでしょね、ある程度 ああいうふうにごじょごじょしてから…たとえばあのああいう今おっしゃった道具をかけるのがイカリの小さいのですよね、あれがごじょごじょしてるからこう…すまるというんじゃないか。大きいのはイカリというように、うちではいうんですよね。

（北尾：ごじょごじょしているからすまる？）

たとえばわたし、若い頃にはタコツボの（漁）やっていたんですよね、その頃には今でも底引きがいるんですけど、タコツボのここからここまでこうたとえば縄をはなして通るとき、はじめのところとしまいのところ、浮きをつけるのが普通ですが、浮きをつけたら底引きにやられるから、確率が高いから浮きをつけずにそのままはなしていくんです、自分の自由視線でからそこにいったらかきあげられるという、そのときにおっしゃったすまるで…

（北尾：いまも船に積んでます？すまる。）

いまはそういうふうな漁法をやっていないから…しかし時たまワイヤーが切れて底引き網が海にすたったりと言うようなときには必ずそれを使ってかきあげることはある。

非常用に積んでいることもあるんですね。今、私が帰ったボートには積んでないんですが、古いボートにはかまえて入れている。いま、あなたがおっしゃったから思いだしたんですが、あれも今の現役の船に…ボートに積みかえなきやいけないという気持ちが早速起こったんですがね（笑）

（北尾：もしよかったら、後でぜひ見せてほしいな思いました…ないですか？）

あそこであればお見せするんですが…どこに置いたかはっきり記憶がないんで古い船の中に…それよりまだこがったな分が…昔底引きにかかってあがった分が小さいのが。

海底もいろいろあって砂のところもあれば泥のところもある。島のすぐ近くに寄ったら
ごつごつのおおきな岩場になったり、そういうときにやった（使ったのが）あるかな…
見てきます（外へ）

（録音ファイル2）

さきほど、島のすぐ周辺のごつごつのなかの大きな石とか小さい石とかの間をこれがあまりツメが
おおきくなりすぎたら岩にかかりますので、たとえばあの岩場の中を鯛を釣るとかアナゴを釣るとか
ノベナワをやっていたんですね、こういう糸でから枝をつけて、ですから大きな綱はかからなくても細
い糸ならこれにかかる、しかも岩にはかからずにといい、そういう知恵です

（北尾：すまるでも長いのと短いがあるんですね、これはいちばん短いすまる？）

これがいちばん短い。ですから、糸をかけるために、岩にかからず糸にだけかかるように。
普通の底引き網のワイヤーが切れたりというような時にはこれが（ツメ）大きなのが必要。
ワイヤーもロープもかかりずらくなる。

（北尾：写真を撮らせてもらっても？）

いいですよ。

（北尾：これは手作り？）

わたしが何かの拍子に…この…さきほどタコツボをかけたときに…これは真鍮です。

（古屋：＜i P a dで星図を出して＞

さっきの「カセボシ」なんですが、この、どの部分の星を言うかはご存知ですか？）

（拡大した星図を見て三ツ星のあたり）ひしゃくのようになっていて…

（サカマスボシの部分）これをこういうふうには、ひしゃくの柄に見えるんですね。

うちのほうでは「カセボシ」と。この頃の天文学者によるとこのオリオン星座のどことかのほうに
我々の太陽系も含まれるんだと聞いたことがあるんですね。

（北尾：カセというのは昔使っていた道具で、今は使っていない、残っていないんですね）

今はそういう道具の名前を知った連中もいないと思いますね。私くらいの年齢より上の連中でないとね、

（北尾：どんなカタチをしていた？カセいう糸をまくのは？木でつくった道具ですよ？）

ああいうふうにはまく。我々は糸巻きを具体的につかっていたことはない。こういう風に…しよっちゅう釣りに
出るのだからこれはまだ現役です。

（北尾：形は違うけどこうやってまくためのものですね？）

これがこう…今ついているから、大きな魚が釣れたら…3年ものとか4年ものとかのブリが釣れたら
このままで止められなかったらこれを持って伸ばすわけですねきゅっきゅと。

（北尾：星で、ネノホシと反対の方に、南の方には星はなかったですか？）

まあ…南に向いてというようなことはあまり聞かないですね。ようするに夜中というか夜明けに帰ると
きに星をたよりに良く帰っていたという。

(北尾：四国の…薩摩の方に見える星とか)

あまり聞かないですね。いろいろ…スマルボシとかカセボシとかネノホシとか星のはなし以外になにか島の事でおききしたいことがあったら

(北尾：カセボシとネノホシと、スマルと…あと、夜明けになったら明るい大きな星が出てきますね?)
あれ、宵の明星とかと明けの明星とかあるですね、金星。

(北尾：明けの明星のことを地域地域でいろんな名前があるんですけどここはどういってました?)
うちのほうではなんですか、5月に宵の明星の金星よりも別に金星の後、木星が良く輝くんですそれをゴントロウボシというんです。

(北尾：ゴントロウボシ?)

そのゴントロウボシ、わたしが想像するにですねゴントロウという御方がこの5月頃に野良仕事にかまけてから、こう星の灯りで仕事を…実質的にできるわけではないんですけどね
日が暮れても野良仕事をやめずに続けていたからゴントロウボシ、木星のことですね。
5月ごろに、あの、宵の明星のあとに大きく輝くんです、5月ごろに。

(北尾：宵の明星のあとに?大きく輝く?5月ごろに?)

そうそう。大きく輝く星。うちの方ではほとんど旧暦の5月に麦刈りをやっていた。

(北尾：その季節に。忙しい麦刈りの時期に)

家に帰らずに、ずっぷりとつくり暮れるまでやっていた(麦刈りを)

明日が雨というような特別なときには我々もやらされたものですよ。明日が雨…当時その頃には家軒別に必ず山に、畑のそばに山小屋があるわけでないから、麦の刈った麦わらのついたままをこう積んでですね、としゃく(十尺?)にこう…この頃でもよそのお百姓さんがこう丸く上手に田んぼの中に積んであがる…あなたがた見られたことないですか?

(北尾：田んぼの中に?)

そうそう大きなかなりおおきな…なにですね、たとえばお相撲さんの土俵ほどはないけどあの形の小さいのをずーとこう…

(北尾：はざかけみたいにかけるんですね?)

それを丸く積んでからその上に茅(ちがや)で編んだ苫(とま)というのをかけたのが苫
そういう苫やなんかもう…編み手がなくなってからすくなくなってからうちの島にも船で使う風を受けてはらまして走る帆が船の帆がありましたね、カバー…この頃はカバーというような言い方を。うちのほうじゃカバというんですがその帆をかわりにかけてから

(北尾：宵の明星がしずんで、ゴントロウボシというのはまだ輝いている?)

そうですそうです、宵の明星のあとにこの大きな星が。5月ごろに真上にある。

ですから田植え唄にもそういうふうなのが昔の屋号で上の部屋という 今の上の部屋でなく昔のほんとうの上の部屋というのがわずかに田んぼがあったんでしょね。

(北尾：ゴントロウボシがでてくる?)

そのうちの田植えというのがこの、あまり田んぼはひろくないのに陽がとっぷり暮れても田植えが済まなかったという。ですから、「上のへやの田植えには 二言まったく行(ゆ)くまいぞ七つ止めかとおもうたらゴントロウボシをおがませた」というこういう文句があるんですね
それがうちの田植え唄に歌われていたらしいです。田植え唄の元唄というのが本当はあるんですが

元唄だけでは文句が足りないというので島ではいろいろ作っては歌っていたんですね。

(北尾：聞かせてもらっても?)

元唄からいわせて

♪やーれ しろもよーい なえもよーい このたにゃ こーめがせんごくぞう
せんごくごめならまいたまきだね まんごくできたらよめとろうに

これが元唄ですね。「万石できたら嫁を取ろうに」という。その歌ばかりではあまり早乙女さんの手が動かないってんで女の腰まわりの歌のほうがよく出ていたんですね。

(北尾：ゴントロウボシも出てくる?)

ゴントロウボシはいまの節でやってみましようかね 1 1 ; 4 7

♪やーれ、うーえのへーやの田一植えに一は 二言全くゆくまいーぞー
ななつやめかとおもうたらーば ゴントロウボシをおがませーた

あんまりやったことないので…もう一度やってみましようか

(再度) 12:15-12:40 12:53

ああいう風に…言葉はいまあなた方にわかりやすいように歌わしていただいたけど

「ゴントロウボシを→ゴントロウボシを」と発音してたんですよ

(北尾：やれ、上のへやの…?)

上のへやの田植えには、二言…二度と再び行くまいぞ、ですね。

(北尾：上とは山の上?)

いや、上というのは屋号でそれがマツモト うちに七件かぶ八件かぶといわれている

ニシヤマとかイシマルとかマツモトとかコジョウとか マツモトの総本家が上。

上下の上。総本家のへや(部谷?)になるから「うえのへや」

(北尾：そのひとの田んぼにはいかないということ?)

田植えには…七つ…午後4時の事ですね。午後12時が九つ、八つが2時。午後4時頃には終わるかと思ったら、ゴントロウボシが見えるまで…ずんぐり暮れる午後7時すぎまでかからされた、だから行くまいと。

(北尾：確かに5月くらいに明るい星が見えますね。)

あなたがたは見られたことはないですか?

(北尾：あります)

あれをうちのほうではゴントロウボシと。5月、夏の初めころに明るく輝く。

あれが木星だということも知らずに、うちのほうではゴントロウさんが、いつもその星が輝くまで仕事をしていたから、ゴントロウボシとうちのほうではあだ名がついたんでしょうね。

(北尾：ゴントロウボシにほかの呼び名は?)

ないですね。ですから木星だということも、わたしもついこの数年前頃になぜあの星がゴントロウボシなのか、なんという星なのかも調べずにわからずに聞き流していたのですがどうでも、そのゴントロウボシというのがどういう星なのかと、星座の本をちらっとみてあれがああ、木星だなとわかったくらいで。唄は若い頃からずっと聞き流していたから。

(北尾：ムギボシというひとはいなかった？麦を刈るころに見えたから)

うちのほうでそれはいわなかったですね。ゴンタロウボシ。仰る通り5月の麦の取入れの頃にありますけど。うちのほうではそれをゴンタロウボシ。しょっちゅうゴンタロウさんと言うひとが野良仕事に…

(北尾：地方地方で名前が違いますね。アルクトゥールス…とあるんですね。名前で) そういうことがあればこそ、方言がね。

(北尾：上の方に輝くその季節、麦刈りのころなのでムギボシとかいうところも、ほかの地域で。地域地域で名前が違うので、こちらではゴンタロウボシがぴったりですね)

(古屋：明るくて、明るい星で色はわかりましたか?)

色というのが…ごくごく明るく輝いて 花火が明るく輝いてマグネシウムを燃やしてまず青く光り輝くような…木星はね。わたしの乏しい知識からいうと質量はかなり軽いというか低いように。土星はガスできていて、軽い。大きな器があったら地球はずぶずぶ沈むけど土星は水で浮かぶで。

(北尾：南の方でなくて上の方?)

上の方です。ちょうどおっしゃる通り5月、うちのも畑を二反ナナセくらいつくってたその頃は動力があるわけではない、牛は飼っていたけど1件で養うほどの飼料がないので3-4件、仲間で5月はうち、6月は次の家というように仲間で1頭の牛を飼って。そのかわり麦まき、麦の畝を起す時は牛でやるんで今日はこのうち、明日はこのうちと話あって順繰りに牛をつかっていた。わたしの子どもの頃に島全体で牛が10頭には余るほどいたと思う。中にはその頃小学校の高学年、高等2年生の頃には牛が離れてからこう、島の道路…あちこちこうさまようのが「牛が離れた危ない」と大人は血眼になって牛を捕まえる、血眼になって騒ぐのが面白いと高等2年のワルガキどもがわざわざ牛を離して悪戯…悪さをする。

余談だけど離れた牛が玄関から入って裏口へ抜けるとその家には必ず不幸がおこるといふ言い伝えがだから牛が離れたら戸口から入らないように気をつけた。

(北尾：宵の明星に他の呼び名は?)

金星が宵の明星というのは、わたしどもはまがりなりにも中学校まで行ったのでかつがつわかるんですが、宵の明星が金星だということを知った連中はあまりいなかった。

(北尾：島の言葉では宵の明星のことをいわなかった?)

明けの明星はよくあの、えさくぎりに出ますのであれが明けの明星がこの時期にあがったからもう午前4時…とかってというのは時期によってあがったから、その、時刻というのは

(北尾：明けの明星は島言葉ではなにか…浜言葉で?)

あまり聞かんですね。明けの明星というような言い方は…島でも具体的にはしないけれどもなんですね、あの星が…明けのあの星があがったから、もう夜が明けるから急げ急げというようなことは、しょっちゅう船頭さんからこう…尻を叩かれたことはありますね。

(北尾：急げ急げと。港に戻らなければならないと。

ちょうどあの、すまるまんぞくと あのすまるっていうのはずっと…いつごろ見えていた?

甚句の口説きの頃は見えていた?)

うちのほうではなんですね、昭和30年代までは旧暦の7月15日がお盆のクライマックスでしたかね。

(北尾：そのときに、一晩中踊るんですか?)

お盆にはもう冒頭にお話しましたように、ほかに楽しみがないので。我々が子どもの頃には大人がやっぱり、なんですね 子どもを寝かしては踊りに出ていた。

(北尾：子供を寝かして踊る)

そういう中でまあ余談になりますけど、私の母が明治 29 年生まれでしたんですけど、母が物心ついてつまり、2 歳か 3 歳の頃にこう踊りが好きだったらしい。太鼓のリズムが好きだったんでしょうね。その頃には明治…逆算しますと母が 29 年ですから明治 32、3 年頃でしょうね。

この小さい島でから 3 カ所で踊っていたらしいですね。すぐそのわきや…東区ではすぐその。中区ではお寺のほうかな。西の方では氏神様のあたりの境内かどっかで。それがなんです、我々がもう若い衆でから口説きをやり始めたころになったら いま診療所がたつてよるあそこで踊っていたんですね。

(北尾：朝まで?)

ああ、もうそれはあれですよ、口説き手だけで踊りが成り立つわけではないんですがね 上手に口説き手のすぐそばでからこう…はやしの熱心なこう、踊りが好きで踊りが好きなのに口説きまではやれないというような御方が ***の上手なお方が傍にきてからずっと逃げず離れずにはやしてください。そうすると勢いが口説きにも力がこもる。そういう雰囲気がずっと続くと仰るように夜が明ける。それこそ「すまるまんぞくはやよはななつ」

(北尾：という時間になる?)

去んでみようかやとまりていのうかちゅうていう文句

(北尾：?)

いぬる・・・というのほうのほうで「家に帰る」去るという字のしたにぬる。

(北尾：「すまるまんぞくはやよはななつ」のときに次にそういうわわけですか?)

あまり聞いたことはないんですが、いんでみようかとまりていのうか いんで***れとまりていにやれというようなこの文句があったんじゃないですか

あまりわたしはそういうふうな題の文句をやったこともないしあまり見たこともないんですがね。

(北尾：年配のひとが 森作さんより上のひとが自由にうたっていた?)

そういうこと。

(北尾：もうそう…はやし手の人とずうっと続いたらすまるが夜は七つまで)

そうです、むこうのほうから…東の方からあがってきて、あれが沈みかけると夜が明ける秋の始まり。お盆の。旧暦の 7 月 15 日ごろになったら…こう。

(北尾：かせぼしはどうですか?)

あれはあまりなにですね、すまるほどうちのほうではないんですがさきほどの「えさこぎ」にいったときにはあれがこの、天を移動する…それで時刻を自分で判断する。カセボンがどこそこへ行ったから、およそ何時だからというようなことはよく時計代わりに島の古老は使っていたようですね

(北尾：季節は何の頃ですか)

わたしの父が先ほどお話しましたように、父が明治 25 年うまれで次の弟があれですね、先ほどつれて***うとしたあそこで分家せていたんですが、それあのハワイで生まれたらしいんです、次の弟が。それがあの明治 32、3 年頃に生まれたのに戻ってからいっさいに入籍して籍の上は明治 35 年生まれで本名は西山ひさいちというんですけどね それは終年、足がわるいために終年一本釣りをやっていたんですね。わたしの父の弟が。足が悪いためにどこにも出稼ぎに出ずにです。終年、一本釣りだから。

一本釣りで9人も子どもを育てたんです、一本釣りだけで。

(北尾：鯛ですか？鯛の一本釣りですか？)

それは春夏秋冬魚種が違います。鯛が釣れるときは鯛を釣るし今の時期はヤズを…ブリの子をヤズを釣ったり。ヤズが釣れる夏分…うちのほうでクロウオっていうんですが、あなた方はメジナとかいうんじゃないですか、においがたかいというんで防府のほうではあまり人気がないらしいです、あれ、ちょっと前ごろに8月の終わりごろにそれが釣れて、で、その頃には沖の砂地のなかのエビでなくて藻の中を、この鉄の枠の後ろに網をつけてそれでこぐと藻の中のエビがとれていた。それでいま言ったようにクロウオとかヤズとかを釣っていた、そういうふうなことを西山ひさいちおじんはやってた。終年。夏にはクロウオ、すんだらヤズ。ヤズと一緒に小鯛も釣れたり、それで遅くなってヤズやなんかが南へ落ちていったらカワハギやなんかがポイントに。うちの方では網代。

(北尾：秋にも？かわはぎは秋？)

ヤズよりも遅くうちの島に残ることがある。ウマヅラカワハギ。

(北尾：冬は？鯛？)

冬になったら…あまりないんです。うちのほうでは冬枯れ。一本釣りは その頃には季節風がいまはあまり強くないんですが その頃になったら雪が降ってしょっちゅう北西の風が吹いて一本釣りは港の中につなぎこんで、収入がないから冬枯れ。なにもかも冬になったら草木が枯れる様にそれになぞらえて一本釣りもまったく収入がないから冬枯れ。

(北尾：星が…西風が…星がこっちのほうに沈むと風が吹く、とか言わなかった？)

星はないんですが、お月さまはよくいった。月は星の仲間ですよ。わかづきのいりそこない。秋が深まって冬のはじまりころになると、たとえば三日月さまがこの西の端に沈むと同時に天候が急変してから、季節風が強まるというようなときには「わかづきのいりそこない」お月様が入りそこなった若い月、三日月。わかづきのいりそこない。

(北尾：10月11月のにしの季節？)

野分が月の入りに急変する。わかづきのいりそこないという言い伝えがありましたね。

(北尾：流れ星なんかは関係なかった？)

流れ星やなんかはあまりないんですが、流れ星がながれてはじめてからきえるまでに「ジソロバンジソロバン」と言うのを唱えたら…字算盤、字と算盤と。が上達するんだという言い伝えがあってジソロバンジソロバンと言われたものですよ

(古屋：それは何回唱えるんですか？)

3回以上。流れ星が消えないうちに3回以上唱えると必ず字算盤が上達する。読み書き算盤の時代のことから。流れ星が消えないうちに。聞かされたことがある。子どものころ体験がある。

(北尾：大阪人はいけませんね、金金金になる)

ところによってなんでしょうね。

(北尾：星でほかによくおおぼし…大きな星をおおぼしといたりするがここでは言わない？)

あまりいわない。北斗七星はなんといったか、今、急にどわすれしたのか…なんかシチセイノホシとかいうような。なにかこうきいたことがある。自信はないけど。

(北尾：シチセイノホシ？)

シチセイノホシ…七つの星だからそのものずばりでしょうけど、あれのまわり具合でから我々は新制中学校を卒業してすぐあの、さきほどの電気着火（船）に連れていかれたんですが昔の高等2年のうちに連れていかれて…ガソリンに引火して全身ほとんど火傷した。身体中に跡が残っている。その頃には漕ぐのは電気着火でこうモーターで小さい網を漕ぐけど揚げるのは人力。ローラーがなかった。ローラー代わりにわたしがそれをまわすと父が後ろからそのロープをひっぱってあげる。小学校の高等2年の頃からつれていかれた。話が元にもどるけど農業といえども漁業といえども人力。船は帆の力や潮の力も利用したけど農業はほとんど人力。裸麦を育てるのに麦を11月の中旬から下旬ころまでにまく。撒いたら新正月前には麦の中を小さい畝でこうまいていく。中を麦と麦との間を畝の中を耕す。耕す前にはじめに一番最初にうつときには泥のカタマリ…うちのは、先ほど言いましたように小さいボクトウにエをとおしてから、そのくれをわらされるのが子どもの役目でした。ですから今日は何曜日か？と母親が指折りかぞえて日曜日を待ってから、日曜日にはかならずそれをする。ここの連中が、こどもが遊ぶのを見るとわたしも遊びたいから時たま畑に行かずにあそんだら夕食を食べさせてもらえなかった。厳しい育てられたかたをした。

（北尾：島では自給自足？）

そうです、このなかに、いま物置があって、そこに麦を俵につめてから、俵から少しずつ出しては足踏みのからうすで麦をついて、からうすでつくのは1回ついただけでは食べられないから1回あらづきというのをついて、むしろにかわかしてからかわいたらもう1回しらげとってから、2回ほど麦を付いてから

（北尾：ゴントロウボシの歌なんかも麦突きのときに歌った？）

麦突きのときは歌わなかった。麦刈りの時も（なかった）…脱穀する機械も持ってって帰ってきて家に保管した。

ものすごく手間がかかった。5月頃に刈り取りしても遅いうちは梅雨が明けてお盆前くらいまでかかった。それしないとごはんが食べられない。

（北尾：ゴントロウボシの歌はいろんな作業しながら？）

田植え作業以外にはない。

田植えが新暦6月の終わりごろ、山田のほうも含めて雨が降ってからじゃないと田植えできない。

山田と中田、中田は水をはりやすいが山田はむずかしいので雨を気にした。

島の古老ははじめのころには雨がすくなくて「からつい」梅雨を「つい」と発音する。

唐のからと空のからをかけて、からついが日本のついになると言った。

（北尾：甚句や口説きの種類も多い？ここの地区はなんという？）

ここは東区

（北尾：西区は西区でまた違う？）

最近踊り手が少なくなって、全部集まって小学校の体育館の下で。あそこが踊り場

（北尾：昔は別々踊った？）

我々がしってからもう一緒でしたけども、わたしの母の頃には3カ所くらいで踊っていた東区と中区と西区とで。お宮の前。最近でも14、15日あそこで踊って16日が氏神様のお祭りというんでお宮の前で踊る。奉納踊り。我々が若い頃は奉納踊りでのお宮に収まりきらないほど集まったら診療所の広場へ移動して踊った。その頃にはかなり上手な口説き手が口説くとはやし手が「通るなよー

通るなよ」とはやしてくれた

(北尾：いま、口説ける人は減った？)

ええええ、ほとんどやり手がない。誰でも口説けるはずなのにやり手がないからちょっと盆踊りをやりたいということになったらわたしに召集がかかる。来て口説いてくれないか、一声口説いてくれないかと。誰でも口説けるはずなのにやらないですね。

(北尾：口説くのは男性だけ？)

女性でもやりますよ。女性もやりますけれども、物おじしてから滅多にやらない。お声が行き届かない、マイク通しても行き届きかねる？気兼ねをして大きな声でやれない。

普通の声で口説きの雰囲気は出ない、腹から声を出して堂々とやらないと

(北尾：前、森作さんがいなかったとき、口説きが下手では嫁さんがもらえないときいたが？)

お盆にそういうカップルがうまれることもしばしばだったので(笑)

(北尾：「口説き」にはそういう意味もある？)

口説きというのはストーリーをやる(口で説明する)から

仰るように異性を口説く、という意味もあるだろう。ストーリーを全部覚えるのは大変な努力がいる。

昔はお宮の中で、家の中で口説きの練習をした。

(北尾：野島は昔、こういう字を書いた？あかねじまと言った？) 50:06

あかねじま音頭といしまる局長さんが野島を口説きの島というよりあかねじま音頭にしようではないか、とわざわざこの本を出す時につけた。

野島はあかねじまという。

(北尾：すまのメロディーもだいたい同じ？)

そう。えびや甚句の文句のなかに入れてもらってる。本来はなかった。

わたしが作って入れさせてもらった(あかねしまの由来をいれた文句)

(北尾：まくらことばのすまはない？)

ない。

(本をさして)このモデルさんが向こう側のおうちのしゅうとめさん、いまはわたしと同期のひさめさんと言う方。87歳くらいになった。

(北尾：民宿やっつけられる「野島屋さん」も甚句を歌う？野島屋のおばあさん)

奥さんもやっつけ、わたしのひとつ先輩、昭和6年生まれ。

(北尾：お元気ですか？)

元気ですけど高齢で以前ほど活動はにぶくなった、聞くところによるとお元気だそう

(北尾：家はすぐ？)

家は漁協のすぐ。漁協に向かって左側のすぐのおうち。野島屋さんの奥さん。

(北尾：民宿なので電話番号をしらべて電話をかけたけど出なかったの心配していた。)

あのおばさんも昭和6年ですから、わたしのように耳は遠くないでしょうけど。

(北尾：にしやまみさえさんもお元気ですか？)

みさえさんが野島屋のおくさん。野島屋が屋号。